

1 派遣期日 令和5年11月9日（木）～11月10日（金）

2 派遣先 学校名 愛知県安城市立南部小学校
所在地 愛知県安城市安城町城堀 48
<https://www.anjo.ed.jp/>

3 研修内容

【大会主題】

豊かななかかわりのなかで自己を見つめ、よりよく生きる子供を育てる道德教育

(1) 公開授業

ア うろうろトーク

自分の考えをタブレットやワークシートにまとめた後、教室を自由に歩いて、友達と考えを伝え合う活動を行っていた。自分の考えを相手に伝えたり、友達の考えを聞くことで、多面的・多角的な考えに気付いたりすることができていた。また、この活動をより充実させるために、「〇人と考えを伝え合ったら座りましょう。」と指示を出したり、伝え合いのポイントを確認したりすることが重要であると考えた。また、教師が机間指導をする際には、児童の考えを把握するとともに、うまく伝え合いができない児童の支援をすることも必要であると考えた。

イ ICTの活用

自分の考えをアウトプットするために、タブレットを使用していた。低学年では、登場人物がどんな顔をしていたか考えて、タブレットを用いて絵に表していた。児童の考えは、電子黒板に反映され、全員の考えを確認することができていた。また、移動式の印刷機を活用し、発表した児童の絵を印刷して板書に反映していた。ICTは、学習の足跡が板書に残らないことが多いが、印刷したものを板書に反映させることでいつでも学習を振り返ることができ、有効的であると考えた。

中・高学年では、ポジショニング機能が多く取り入れられていた。年齢が大きくなるにつれて、自分の考えを発表することに抵抗感を示すようになる。ポジショニング機能を活用し電子黒板に写すことで、挙手をして発表をせずとも全員の考えを共有することができ、多面的・多角的な思考をするために有効的であると考えた。また、板書にもポジショニングに表した考えが書かれており、低学年と同様にいつでも学習を振り返ることができ工夫がされていた。

ウ ゲストティーチャーの活用

低学年では、赤ちゃんの人形を抱いたゲストティーチャーを活用していた。「お母さんはなぜ怒るのか」という発問に対して、教師が予想していた考えが児童から出てこなかった。その際に、今日は赤ちゃんがいるお母さんに来てもらっているから話を聞いてみよう」と投げかけ、ゲストティーチャーが話をした。話をした後の発問では、教師が予想していた内容の発言が増えていた。ゲストティーチャーを活用することで、教材をより身近に感じられ、価値の押し付けにならずにねらいにせまることができていた。

エ 板書

どの学級も横書きの板書であった。黒板を3分割して、左側には導入、中央には中心発問、右側には終末部分の考えが書かれていた。このような板書構成にすることによって、1時間の学習流れや考えの深まりを児童が捉えやすいと考えた。また、すべての板書に本時のめあてが書かれていた。児童が学習に見通しをもつことができたり、ねらいとする道德的価値の方向付けをしたりする点で有効であると考えた。

(2) 記念講演

講師：十文字女子大学 教育人文学部 児童教育学科 教授

前文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 浅見 哲也氏

演題：「子供のよさや可能性を引き出す道德教育」

ア 道德の「特別の教科」化について

- ① 「答えが一つではない課題に子供たちが道德的に向き合い、考え、議論する」道德教育への転換により児童生徒の道德性を育む。
- ② 年間 35 単位時間を確実に確保するという量的確保、「考え、議論する」道德への質的転換が求められている。

イ 全教育を通じて行う道德教育の推進について

① 道德教育と道德科の関係

道德教育は、特別の教科である道德を要として学校教育全体を通じて行うものである。学校行事や各教科の指導内容が道德的価値とどう結びつくのかを意識することが重要である。

② 道德教育と道德科の目標

どちらの目標にも「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う」という文言が入っている。道德性とは、「よりよく生きるための基盤となるもの」「道德的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすもの」「人間らしいよさであり、道德的価値が一人一人の内面において統合されたもの」である。

ウ 道德科について

① 道德科の目標

道德科の目標の中に、「よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため（中略）道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」という一文が示されている。学校教育における道德性は、道德的判断力、道德的心情、道德の実践意欲、道德的態度で構成されている。授業者が道德の授業を通してどの様相を育てるのかを選び授業を展開することが重要である。

② 道德科の指導はどのように行えばよいのか

道德科の目標に示されている通り、「道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めるための学習」をすることが道德の授業において重要である。

学習指導過程の展開の段階で、教材を活用しながら道德的価値を自覚していくことが重要である。学習指導過程とは、①自分の価値観を確かめる。（人間理解＝自己を見つめる）②みんなの価値観を出し合い、比べ合う。（他者理解＝多面的・多角的に考える）③いろいろな気持ちや考えの中から、よりよいと思うものを見つけ、自分の生き方に生かそうとする。（価値理解＝自己の生き方についての考えを深める）である。

③ 道德の評価はどのように行えばよいのか

道德性が養われたか否かは、容易に判断できるものではない。道德科の指導では、学習状況（学んでいる姿）やその成長の様子を適切に把握し、評価することが求められる。

エ 令和の日本型学校教育について

① 道德科における ICT の効果的な活用

② 2030 年の社会 - 人工知能の進化と自動化 -

4 感想

道德が特別の教科となり、6 年目を迎えた。年間 35 時間の時数確保は実現できているが、「考え・議論する道德」への質的転換については、課題が残る授業展開が多い。また、道德教育についても、カリキュラム・マネジメントが重要であると理解しているが、こちらでもまた課題が多いと感じる。今回の先進校視察で得た知識や指導方法を生かして、よりよい道德教育につなげていくことができるようにしたい。